

令和 5 年 5 月 5 日現在

機関番号：37117

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K11859

研究課題名（和文）民俗芸能のグローバル化と実践的観光活用に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Glocalization of the Drum Dance Eisaa and Tourism Practices
Inside and Outside Okinawa

研究代表者

森田 真也（MORITA, SHINYA）

筑紫女学園大学・文学部・教授

研究者番号：10412686

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、民俗芸能のグローバル化、同時に進行する再ローカル化の動きに着目して、観光への活用の現状と課題、さらには新たな可能性について解明することを目的とした。そして、現在、民俗芸能がどのように観光と関わっているのかについて、地域社会との関係や変容とあわせて、新たなイベント、新しい芸能団体の創出と活動、さらには地域振興や活用の側面について現地調査を行なった。その結果、現地の人々による主体的な表象、パフォーマンスが生み出す創発的連帯、演者たちの集合的意識と自立的実践から、当該社会におけるアイデンティティ、観光活用と地域振興に繋がっている、文化的シンボルの生成過程と運用状況が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では主に沖縄のエイサーを事例とし民俗芸能が観光と関係しながらグローバル化していく過程と同時進行する再ローカル化の動きについて、観光活用の実態、地域社会との関係について解明することを目指した。本研究の第一の意義は、民俗芸能を戦後の社会変化、観光化といった視点で分析した点にある。本研究では伝統文化を活用した観光と地域の持続的活性化の在り方を考えた。第二の意義は、民俗芸能の観光化をグローカリゼーションという視点で地域社会の人々の実践や意識を分析した点にある。本研究では民俗芸能を通して観光を基点に進行するグローカリゼーションの相互作用から、文化的シンボルと地域的アイデンティティを考えた。

研究成果の概要（英文）： This study focused on and examined the globalization and re-localization of folk performing arts, such as drum dance eisaa inside and outside Okinawa, through conducting fieldworks. The study aimed to elucidate the current situation and problems of utilization of tourism. It also researched and discussed how folk performing arts are currently related to tourism, along with the relationship and transformation with local communities, new events, the formation and activities of new performing arts groups, and the regional promotion and utilization.

The study proved the processes and the uses of cultural symbols which relate to the subjective representation of the local people, the emergent solidarity generated by the performances, and the collective consciousness and practices of the performers. Thus, the study revealed that the creative symbols can lead to the identity formation of the community, tourism utilization, and regional revitalization.

研究分野：民俗学・文化人類学

キーワード：民俗芸能 観光 グローカル化 沖縄 エイサー 地域振興 アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

これまで民俗芸能や祭礼は、主に民俗学者や芸能研究者によって、信仰と結びつけられて語られてきた。しかしながら、昨今、民俗芸能や祭礼は地域と直結した観光の好素材として、観光関連業者やマスメディアだけでなく、各地の自治体も積極的に取り上げてきている。全国的に進行する民俗芸能の観光化に民俗学が対応するようになったのは、1990年代後半以降である。特に近年では、「文化資源」や「文化遺産」という呼び名で捉えられる一方、その経済効果に多大な関心が寄せられ、行政主体による民俗芸能や祭礼の地域振興への活用が提唱されることが多くなった。

本研究で主として取り扱う沖縄の民俗芸能「エイサー」もこれまでの研究では、地域や伝統と結びつけられてきた。沖縄県内のエイサーを広域に総括した『エイサー360度—歴史と現在』沖縄全島エイサーまつり実行委員会・那覇出版社〔沖縄市企画部平和文化振興課編1998〕にみるように、エイサーの主体は各地の青年会であったことから、新たなイベント、さらには観光利用について言及されることは少なかった〔森田2015〕。また、新しいエイサー団体の創設や活動についても同様であり、新しい団体は「創作エイサー」と称され、二次的なものとされてきた。しかしながら、エイサーは観光やイベントと関わりながら地域を超えて活動を広げ、新しいネットワーク、アイデンティティ形成にも関わってきた〔城田2000,2004〕。

そこで本研究では、まず沖縄の戦後の観光化を概観しながら、青年会のエイサーの取り組み、エイサーを活用した観光の在り方についてみていく。さらに、新しいイベントの内容、自治体と各種団体との関わり、開催経緯、社会的な評価、効果等についてみていく。そして、現地調査から、観光との関係性、演舞の特質、人々の意識について明らかにしていく。

以上、本研究は、民俗学・観光(文化)人類学の立場から、グローバル化、再ローカル化を念頭におき、戦後、民俗芸能がどのように観光や人々の意識に関わってきたのかについて、さらには可能性や課題を持つのかを浮き彫りにする。加えて、地域社会と民俗芸能や祭礼、つまり伝統文化を活用した持続可能な観光のあり方について明らかにしていくものである。

2. 研究の意義と目的

本研究においては、主に沖縄のエイサーを事例とし、民俗芸能が観光と関係しながらグローバル化していく過程と同時進行する再ローカル化の動きについて、戦後の社会変化を念頭に置きながら、観光活用の実態、地域社会との関係性、新たな可能性と課題について解明することを目的とした。そして、現在、民俗芸能がどのように観光と関わっているのかについて、地域社会との関係や変容とあわせて、新たなイベントの開催や芸能団体の創出、自治

体等各種団体の活動実態を通して、地域振興や観光活用といった実践的な側面について、さらには文化的シンボルの生成、アイデンティティとの関わりについて考察した。

具体的には、主として沖縄において旧暦の盆に先祖供養のために行われてきたエイサーと観光の関わりを取り上げる。本来エイサーは、各地域の青年会を母体にして伝承されてきたものである。しかしながら、昨今、旧盆以外にも様々なイベント等において演じられるようになっていく。また、沖縄県内だけでなく、県外、海外においても各種イベントが開かれ、新しいエイサー団体が結成されている。さらに、観光関連施設においても、エイサーが随時演じられ、土産物等でもエイサーをモチーフとした商品が並べられている。地域社会によって維持されてきた民俗芸能が、観光を媒介にしながら、特定の地域を超えてグローバルに展開しているのである。今日、エイサーは、躍動感と活力があり、伝統的な文化や歴史を持つ沖縄を象徴するパフォーマンスとして人気をくしている。

そこで本研究では、第一にエイサーが地域社会を超えながら観光に利用されている実態について、各種イベントの内容、自治体と各種団体との関わり、新しいエイサー団体の活動について考察する。第二にハワイのフラとも比較しながら、民俗(民族)芸能が観光化とも関わりながらグローバル化していった経緯と現状について考察する。第三に民俗芸能の文化的シンボリック化と地域社会の人々のアイデンティティとの関わり、民俗芸能の観光活用の可能性と課題について考察した。

なお、本研究は科学研究費補助金(基盤研究(C))「民俗芸能の観光化にみるグローバル化と再ローカル化に関する研究」(期間:2015年度~2017年度)の後続的な位置付けにある。先の共同研究においては、民俗芸能の観光化とネットワーク形成、アイデンティティ生成への寄与といった側面に注目してきたが、本研究では、さらに「地域振興」と「観光活用」、「アイデンティティ形成」といったより実践的な動きについて、ハワイのフラの事例も参照しながら研究を深めた。

このように本研究では、民俗芸能が観光とイベントと関係しながらグローバル化していく過程と新たな展開について、そしてグローバル化と同時進行する再ローカル化について考察の対象とした。そして、現地調査を踏まえて、民俗芸能を活用した観光のあり方について、その可能性と課題について考えた。

本研究の第一の意義は、地域や伝統とともに捉えられてきた民俗芸能エイサーを、戦後の沖縄社会と日本との関係の変化、観光化といった視点で分析した点にある。これまで民俗芸能はその本質性が地域とともに語られてきた。しかしながら、全国的に広がる観光化の波は、民俗芸能を観光の素材、商品としてきており、各自治体では過剰なまでの期待を寄せている場合もある。本研究では、そこにある本質化と商品化の綱引きを、現地の直接的な調査、現場の声を拾いながら捉えた。そして、全国的に進む伝統

文化を活用した観光と地域社会の関わり、観光活用と地域の持続的活性化、その可能性と課題を考えた。

第二の意義は、民俗芸能の観光化を、人、物、金、情報等が迅速かつ大規模に移動するグローバル化だけでなく、同時に進むローカル化という、地域社会の人々の実践や意識を視野に入れた分析を行った点にある。グローバル化と同時に進行するローカル化について、社会(文化)人類学者の上杉富之は「グローカリゼーション」〔上杉2011,2014〕という概念で捉えることを提唱している。グローバル化は世界を均質化するとともに、地域独自の影響をもたらす。観光経済や情報はグローバルに展開するが、地域社会はそれをそのまま享受するのではなく、相互作用から多様な展開を招くというのである。本研究においては、民俗芸能を通して、観光を基点に同時進行するグローバル化とローカル化の相互作用、及び緊張関係に注目し、文化的シンボルの生成と運用、地域的アイデンティティの諸相、観光と地域社会の今日的あり方を模索した。

3. 研究の方法

本研究では、民俗芸能と観光の関わりをグローバル化、再ローカル化をキーワードにして、現地調査を中心にして読み解いていった。具体的には、沖縄の民俗芸能エイサーに関わる人たちがどのような地域的な活動やイベント参加、観光への関与をしており、どのような意識を持っているかに注目した。そのため、図書館、行政機関等において観光化の過程、現状に関する文献他の資料収集と分析を行うだけでなく、調査地として選定した、沖縄本島中部及び沖縄からの移民の地であるハワイにおいてフィールドワークを行った。ただし、本研究の後半では、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大により現地調査が困難となったため、文献による研究を進めた。そして、戦後沖縄の観光化と社会変化を念頭に、民俗芸能の変容とその特質、現在の社会的役割や地域振興への寄与、文化的シンボリズム、アイデンティティとの関わり等について、グローバル化、再ローカル化の視点から明らかにした。そして、伝統文化を活用した観光と地域社会のより望ましい関係性、持続可能な観光のあり方について解明した。

研究代表者・森田真也は、戦後沖縄の観光を概観し、エイサーの観光との関わり、新たなイベントについて調査研究を進めた。具体的には、青年会の演じてきたエイサー、イベントと観光との関わりを通して、活動の拡大、地域へ再帰するアイデンティティの関わりについて明らかにしていった。そして、観光の問題だけでなく、民俗芸能のグローバル化、並行して進む再ローカル化というグローバル現象の理論的総括を行い、地域社会と伝統文化の観光活用についての考察を進めた。分担者・城田愛は、エイサーの観光化による変容と発展について研究を進めた。具体的には、新しいエイサー団体、イベント参加の現地調査を通して、観光化によるパフォーマンスの変容について明らかにしていった。そして、観光やイベント参加を介した

新興のパフォーマンスとしての発展、ネットワーク形成、観光への寄与、地域の活性化の可能性について考察を進めた。上記研究課題を遂行するにあたり、分担領域、現地調査を完全に分けるのではなく、共同で沖縄、及びハワイの観光化の実態、パフォーマンスの演舞、行事やイベント等の調査を行い、事例把握や問題点を随時共有した。

なお、本研究は3年目以降、新型コロナウイルス感染症拡大のため現地調査を中止し、デスクワークを主体とした。そして、ハワイの観光化、フラを積極的に比較検討することにした。これまでの研究成果を公開するため、学術出版を行うべく一部研究計画を変更して遂行した。

調査研究日程

2018年度(1年目)

第1回調査、2018年8月24~9月3日(沖縄市、うるま市、北中城村、読谷村、名護市、那覇市等)。初年度は、エイサーの演舞、イベント、観光化と地域振興との関わりについて現地調査(参与観察、インタビュー)を行った。具体的には、エイサー会館、むら咲むら、沖縄市観光協会、北中城村観光協会、沖縄県立芸術大学、沖縄国際大学等、さらには琉球国祭り太鼓関係者にインタビュー調査を行った。そして、各地域の旧盆のエイサー演舞、沖縄市の「沖縄全島エイサーまつり」、読谷村の「高志保大通りエイサー天国」、ホテル等でのエイサー関連イベントに関する共同調査を行った。あわせて、図書館等で関連資料の収集、文献の購入を行った。

第2回調査、2019年2月19日~27日(沖縄市、うるま市、恩納村、金武町、那覇市等)。観光イベントの実施状況と課題を抽出するため、観光関係団体、演舞団体等の現地調査(参与観察、インタビュー)を行った。具体的には、エイサー会館、沖縄観光コンベンションビューロー、沖縄県文化振興会、うるま市観光物産協会、ホテル内のエイサー団体、創作エイサー協議会関係者にインタビュー調査を行った。そして、「ちむぐるチャリティフェスタ」で新興のエイサー団体の演舞に関する共同調査を行った。あわせて、図書館等で関連資料の収集、文献の購入を行った。

2019年度(2年目)

第3回調査、2019年8月26日~9月7日(アメリカ合衆国・ハワイ州)。民俗芸能のローカル化について、沖縄からの移民の地であるハワイにおけるエイサーの展開、活動、イベント、ハワイ社会との関わりについての現地調査(参与観察、インタビュー)を行った。具体的には、沖縄系移民の多いハワイで9月(8月)に開催された「オキナワン・フェスティバル」のパフォーマンスの共同調査、ハワイ・オキナワン・センター等でインタビュー調査を行った。また、同じく複雑な近代、観光地である沖縄とハワイの比較検討を行うために、イオラニ宮殿、クルージング船、ハワイ大学、ピショップ・ミュージアム他において、フラのパフォーマンス、及びハワイ社会と

歴史についての共同調査を行った。

2020年度(3年目)

新型コロナウイルス感染症拡大により、現地調査中止(研究計画をデスクワーク主体に変更)。

2021年度(4年目:延長)

同じく現地調査中止。研究成果公開のための学術出版へ計画を変更。

2022年度(5年目:再延長)

同じく現地調査中止。研究成果公開のための学術出版へ計画を変更。

4. 研究成果

本研究は期間を当初3年とし、民俗芸能のグローバル化、同時に進行する再ローカル化の動きに着目して、観光への活用の現状と課題、さらには新たな可能性について解明することを目標とした。しかし、3年目以降、新型コロナウイルス感染症拡大のため現地調査を中止し、デスクワークを主体とした。研究計画を変更、4年目(延長)5年目(再延長)を行い、研究成果公開のため、後述するように学術出版を行った。

本研究では、沖縄の民俗芸能エイサーを取り上げ、以下3点を中心に研究を進めた。1)民俗芸能と観光と地域社会との関わり、2)新たなイベント、新しい芸能団体の活動と地域振興の関わり、3)民俗芸能と観光との関わりから生み出される、文化的シンボルとアイデンティティの諸相について。そして、最終的に民俗芸能の実践的観光活用と地域振興の関わりについて明らかにした。

初年度の重点課題は、沖縄観光の歴史と現状、エイサーの演舞とイベントの実態、観光化、地域振興との関わりであった。

そのため、沖縄本島中部を中心に、各地域の旧盆のエイサー演舞、沖縄市の「沖縄全島エイサーまつり」他のイベント、ホテル等でのエイサー関連イベントに関する共同調査を行った。森田が主として沖縄観光史、観光の現状について整理し、青年会のエイサーの活動、エイサーを用いた地域振興の試みについての調査研究を行った。城田が主として琉球國祭り太鼓他の新興の創作エイサー団体の活動、イベントとパフォーマンスの特質についての調査研究を進めた。さらに、自治体、各種団体、ホテル等において、共同でのインタビュー等を行った。

初年度の調査研究において、エイサーが近代以降、旧盆以外の演舞を様々な形で行ってきたこと。そして、今日エイサーを冠したイベントが、地域社会の人々と観光客の両方に人気を集めていること。そのような動きに呼応して、1990年代以降、創作エイサー団体が増加し、その活動が活性化していることがわかった。また、自治体、観光関連団体、ホテル等においてのエイサーの活用が拡大する一方、課題を抱えていることも見えてきた。そして、民俗芸能が地域社会を超えながら、地域社会を広域につなぐものとして捉えられ、さらに楽しまれてい

ること、外部の観光客他の人々から沖縄を象徴するパフォーマンスとして理解されていること等が判明した。

2年目の重点課題は、観光イベントの実施状況とその課題を抽出すること、さらには民俗芸能のグローバル化について、沖縄からの移民の地であるハワイにおけるエイサーの展開、活動とイベント参加、ハワイ社会との関わりについての現地調査を行い、その実態把握をすることであった。森田が主として観光イベントの実態と課題についての整理を行い、城田が主として創作エイサー団体の活動、ハワイでの展開についての整理をした。そして、観光地である沖縄との比較検討を行うために、ハワイで開催された「オキナワン・フェスティバル」の参与観察とインタビュー、エイサーやフラの演舞の調査と社会的位置付けの調査を共同で行った。

2年目の調査研究において、イベントにおける民俗芸能の演舞がハワイ内の沖縄系移民のネットワーク形成と維持、エスニシティを喚起するのに寄与していること。そして、エイサーが沖縄系移民のアイデンティティを内外共に示す存在となっていること、沖縄からの参加もあり、沖縄系移民が自己のルーツとのつながりを再確認する場になっていることが明らかになった。さらに、外部からの観光客を呼ぶのに大きく役立っているとはいえないが、地域に根付いた大きなイベントとしてハワイ社会のなかで認知されていること、会場が2018年にハワイ・コンベンション・センターに変わったことで、自己ツーリスト化とでもいうような現象が生じ、多くの人々に楽しまれていることが判明した。また、パフォーマンスについては、単なる移民先への民俗芸能の移動だけでなく、現代的演出がなされていることもわかった。そして、地域を超えて拡大するエイサーの人々の意識への関与、社会的影響について、さらには新しいエイサー団体のパフォーマンスの特性、イベントでの役割について明確になった。

3年目、当初の重点課題は、民俗芸能と観光イベントの関わりについて考察を進めることであった。そのため、経済関連団体とエイサーの活用、マスメディアとの関係、創作エイサー団体の活動とネットワーク形成、さらにハワイにおけるイベントの調査を計画していた。しかし、予定していた現地調査が新型コロナウイルス感染症の影響によって中止を余儀なくされた。そのため、一部研究計画を修正し、代表者・分担者、共にデスクワークを進めた。具体的には現地調査で得た資料の整理、森田・城田で原稿やデータの確認を行い、これまでの研究成果を整理することで、本研究の成果出版のための学術出版助成を申請する準備を行った。

3年目の研究においては、沖縄のエイサーとハワイのフラの共通性に着目した。それは、近代において大国に主権を奪われ、統治され、マイノリティ化された経緯。大きな軍事基地を有しながら、観光産業を経済の中心にしていること。さらに、地域内において行われてきた民俗(民族)

芸能が、地域の人々に愛されているだけでなく、観光客向けに演舞されているような状況である。民俗(民族)芸能の観光活用、社会的位置付、さらにはアイデンティティとの関係について考えていく上で、近代化によって生じた観光、それだけでなく各種イベント、米軍基地、刑務所等、多様な場で演じられる事例を視野に入れることにした。そして、パフォーマンスの現場から、文化の創造と人々のアイデンティティ生成のダイナミズムを考察することを試みた。

なお、同年、森田真也が沖縄観光と民俗の関わりを分析した論考「観光と民俗」を所収した『沖縄県史 各論編 9—民俗』沖縄県教育庁文化財課史料編集班編・沖縄県教育委員会〔森田 2020〕が刊行された。

4年目(延長)も前年度に続き、新型コロナウイルス感染症の影響によって、現地調査の中止を余儀なくされた。しかし、本研究の成果公開のための学術出版助成を筑紫女学園大学に申請し、獲得することが出来た。そのため、これまで現地調査で得た資料の整理、文献による研究を進め、新たな論考の執筆、既発表の論考の加筆・改編・修正、出版用入稿原稿の作成を行った。

そして、前年度に続き、沖縄のエイサーとハワイのフラのパフォーマンスの現場から、歴史的に存在する様々な「隔たり」と「繋がり」の社会的状況に着目し、文化の創造と人々のアイデンティティ生成のダイナミズムを論じた。民俗芸能が、地域をスタート地点としながらも、観光という文脈において、メディアの後押しもあってグローバル化した経緯、そして、同時に進む再ローカル化という現象について分析した。

なお、別途、基礎研究として、近代における日本との複雑な関係性を背景にした戦前の沖縄観光の萌芽と特質、民俗芸能と伝統工芸の関わりについて、ガイドブックや文献資料等を用いた考察を進めた。

5年目(再延長)、研究成果公開の学術出版のため、引き続き現地調査で得た資料の整理、文献による研究を進め、新たな論考の執筆、既発表の論考の再編を重ねた。そして、森田真也・城田愛の共著による『踊る「ハワイ」・踊る「沖縄」——フラとエイサーにみる隔たりと繋がり』明石書店〔森田・城田 2022〕を刊行することが出来た。

同書では、沖縄のエイサーとハワイのフラに焦点を絞り、近代化によって生じた観光やイベント、米軍基地、刑務所等で演じられる事例も取り上げた。そして、近代化の特性である「再帰性」と伝統の議論〔ギデンズ 1993〕を参考にして、パフォーマンスが創り出す、様々な「隔たり」と「繋がり」、文化的シンボルの創造と人々のアイデンティティのダイナミズムを論述した。現地の人々の主体的表象を評価し、パフォーマンスが生み出す「創発的連帯」〔松田 2009〕、そして社会変化という外在的要因だけでなく、演者たちの集合的意識と自立的実践から、当該社会における文化的シンボルの生成過程と運用状況、観光化との関わりについて検討した。そして、主として民俗(民

族)芸能のグローバル化について比較することで、民俗芸能とアイデンティティとの関わり、持続可能な観光への寄与の可能性を見出した。

なお、別途、同書出版以降は、基礎研究として、戦後の沖縄観光再興の流れ、アメリカ統治下という特異な状況にあった戦後の沖縄観光の復興、慰霊と戦跡巡礼との関わり、そこにある政治性について、ガイドブックや文献資料等を用いて考察を進めた。

以上、本研究では、沖縄の民俗芸能エイサーを中心的に取り上げ、民俗芸能のグローバル化、同時に進行する再ローカル化の動き、観光と地域社会との関係性、実践的観光活用の現場から、地域振興の可能性と課題、文化的シンボルとアイデンティティの諸相について明らかにした。

<引用文献>

- 上杉富之 2011「グローカリゼーションと越境——グローバル研究で読み解く社会と文化」上杉富之編『グローカリゼーションと越境——グローバル研究叢書 4』成城大学民俗学研究所グローバル研究センター pp.3-19.
- 2014「グローバル研究を超えて——グローバル研究の構想と今日的意義について」『グローバル研究』1:1-20.
- 沖縄市企画部平和文化振興課編 1998『エイサー360度——歴史と現在』沖縄全島エイサーまつり実行委員会・那覇出版社.
- ギデンズ、アンソニー 1993『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏訳 而立書房.
- 城田愛 2000「踊り繋がる人びと——ハワイにおけるオキナワンエイサーの舞台から」福井勝義編『近所づきあいの風景——つながりを再考する(講座 人間と環境 8)』昭和堂 pp.58-89.
- 2004「オキナワンの踊りと音楽にみるハワイ社会——エスニシティの交差する舞台から」後藤明・松原好次・塩谷亨編『ハワイ研究への招待——フィールドワークから見える新しいハワイ像』関西学院大学出版会 pp.249-260.
- 松田素二 2009「文化/人類学——文化解体を超えて」『日常人類学宣言!——生活世界の深層へ/から』世界思想社 pp.27-53.
- 森田真也 2015「地域を演出する」市川秀之・中野紀和・篠原徹・常光徹・福田アジオ編『はじめて学ぶ民俗学』ミネルヴァ書房 pp.61-72.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森田真也	4. 巻 第30号
2. 論文標題 「『鬼滅の刃』巡ってみた 現代社会における鬼の表象とコンテンツ・ツーリズムに関する覚書」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『筑紫語文』	6. 最初と最後の頁 86-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田真也	4. 巻 第304号
2. 論文標題 書誌紹介「沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編9 民俗』」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日本民俗学』	6. 最初と最後の頁 91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田真也	4. 巻 第305号
2. 論文標題 書誌紹介「久万田晋・三島わかな編『沖縄芸能のダイナミズム 創造・表象・越境』」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本民俗学』	6. 最初と最後の頁 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田真也	4. 巻 第3403号
2. 論文標題 書評「塚田健一著『エイサー物語 移動する人、伝播する芸能』」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『図書新聞』	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森田真也
2. 発表標題 「沖縄観光における『文化』の活用の展開と現状」
3. 学会等名 日本民俗学会第70回年会、駒澤大学、2018年10月14日
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森田真也
2. 発表標題 「戦後沖縄における米軍基地と地域アイデンティティ 千原エイサー保存会の事例を中心に」
3. 学会等名 日本文化人類学会九州・沖縄地区研究懇談会（九州人類学研究会）・沖縄民俗学会合同研究会、大濱信泉記念館、2018年11月3日
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 城田愛
2. 発表標題 「ハワイ移民と沖縄を架橋する『うた』と『ぶた』 二世女性の個人史にみる沖縄戦救済運動の舞台」
3. 学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会、弘前大学、2018年6月2日
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 森田真也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 沖縄県教育委員会	5. 総ページ数 730
3. 書名 「観光と民俗」沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編9 民俗』	

1. 著者名 城田愛	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 349
3. 書名 「ハワイ日系移民史からの問いかけ 米軍機『マダム・ペレ』の怒りの矛先とは」石森大和・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章 日本とのかかわり』	

1. 著者名 城田愛	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 349
3. 書名 「観光にみるハワイと日本とのかかわり 爆弾投下から花火献花へ」石森大和・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章 日本とのかかわり』	

1. 著者名 城田愛	4. 発行年 2022年
2. 出版社 琉球新報社	5. 総ページ数 241
3. 書名 「ハワイへ渡った移民とエイサー 『琉球盆踊』から『オキナワン・ボン・ダンスへ』」野入直美他編『わったー世界のウチナーンチュ！ 海外県系人の若者たちの軌跡』	

1. 著者名 森田真也・城田愛	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 244
3. 書名 『踊る「ハワイ」・踊る「沖縄」 フラとエイサーにみる隔たりと繋がり』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	城田 愛 (SHIROTA CHIKA) (80425389)	大分県立芸術文化短期大学・その他部局等・准教授 (47501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関